



豊中市教育センター
〒560-0033 豊中市蛍池中町 3-2-1-600
TEL 06-6844-5290
FAX 06-6840-8127

平成20年(2008年)7月16日 第32号

「場」をつくる

「明日は何にしようかな・・・。」パソコンとにらめっこしながら、子どもがつぶやく。

この春、中学校を卒業し、高校の入学式までの間、晩ご飯を作ってくれることになり、料理のページを検索している。

「今日は鶏肉やったから、明日は魚にしようか。」と言いながら、冷蔵庫の中にある物を使い、ないものは休日に一緒に買い出しに行くため、材料をメモしていた。彼女なりに工夫を凝らし、メニューを作り、晩ご飯を作ってくれた。

気になる味の方とはいうと、これがなかなかいける。中学生の時は豚汁一つ作ら(れ)なかったにもかかわらずである。

わたしの帰宅が遅いせいか、やることが何もなかったからか、いい機会を得ることができた。家族から頼りにされ、ほめられて、まんざらでもない様子で、かなり自信がついたようだ。わたしは、食事の片づけをしながら、コンピュータの前でいろいろ考えめぐねている子どもの姿を見て、この時間が大事なんだとつくづく思った。

かつて、わたしは技術・家庭の授業で、子どもたちに包丁を扱う技術を身につけさせてたくて、皮むきの実技テストを課したことがある。一度、授業で練習し、1週間おいて本番。1回きりの練習で力がつくわけではなく、家で練習することが目的でもあった。2人の男子生徒が個々に「先生、マイ包丁持って来てええか。」と尋ねてきた。小さいころから自分の包丁を持っていること、いろいろと料理を作っていることなど教えてくれた。「かっこいいなあ、ぜひ腕前を披露してね。でも、今回はみんなと同じ条件でやろう。」と話し、実技テスト本番を迎えた。

この2人の包丁の扱いはさすがであった。もちろん、他にもすばらしい技能を見せてくれた生徒がいた。周囲の生徒は尊敬のまなざしで鮮やかな彼らの手つきを見ていた。ある女子生徒はテストの時にうまくできず、よほど悔しかったのか、しばらくしてから「先生、見て。」と申し出てきた。練習の成果はありありと伺えた。やり終えたときの誇らしげな表情が印象的だった。

あのような機会がなければ、私も、また、他の生徒も彼らの隠れたすばらしい一面を見ることができないでいたと思う。

人が持つ力には、まだ表に出ていないものがたくさんある。それをどのようにして引き出していくのか。やらされたのではなく、自分が決断してやる。その企画を立てること、研究や練習、本番のドキドキ感、そのすべてが人を成長させる。

自分がやりきった達成感、事後の「ありがとう。おかげでとっても助かった。」という他者からの一言や賞賛、自分も捨てたもんやないという自己有用感が確実にその力を裏打ちし、自尊感情を育てる。

そのために、家庭においても、学校でも、社会でも様々な側面からアプローチし、人を育てる「活躍の場」をしかけていきたいものである。(鈴木)



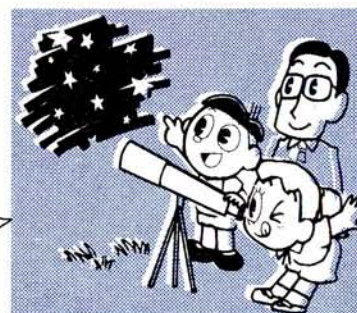
夏季休業中の研修案内

月日(曜)	午前		午後	
	研修名	担当	研修名	担当
7/22(火)	情報基礎研修② 教育相談研修② 初任者研修(社会体験研修②)	教育センター 教育センター 教育センター	情報基礎研修② 特別支援教育コーディネーター研修② 初任者研修(社会体験研修②)	教育センター 教育センター 教育センター
7/23(水)	ネットワーク担当者研修	教育センター	ネットワーク担当者研修	教育センター
7/25(金)	情報基礎研修②	教育センター	情報基礎研修② 生徒(生活)指導研修①	教育センター 青少年補導センター
7/28(月)			教育相談研修③	教育センター
7/29(火)	情報基礎研修③	教育センター	情報基礎研修③	教育センター
7/30(水)	初任者研修(自然体験) 技術・家庭科教育研修(技術)	教育センター 教育センター	人研教育研修③ 技術・家庭科教育研修(技術) 障害児教育連続研修	人権教育企画課 教育センター 教育センター
7/31(木)	ニューステージ研修Ⅲ 情報基礎研修③	教育センター 教育センター	情報基礎研修③	教育センター
8/1(金)	ニューステージ研修Ⅰ④ 理科教育研修(地学) 教育相談研修④	教育センター 教育センター 教育センター	特別支援教育コーディネーター研修③ 理科教育研修(地学)	教育センター 教育センター
8/11(月)	とよなか「学び」プロジェクト研修	教育センター		
8/18(月)			環境教育研修会 初任者研修(学級経営の実際)	教育センター 教育センター
8/19(火)	ネットワーク担当者研修	教育センター	ネットワーク担当者研修 不登校対応研修②	教育センター 少年文化館
8/22(金)	情報活用研修①	教育センター	情報活用研修①	教育センター
8/25(月)	学校事務職員研修会	教職員課		
8/28(木)	夏期教職員研修	教育センター	情報活用研修①② 障害児教育研修	教育センター 教育センター
8/29(金)	情報活用研修②	教育センター	情報活用研修②	教育センター

※ニューステージ研修Ⅱ(小・中)は、各コースによって日程が異なるため、別紙にてお知らせします。

※8/18(月)予定の人権教育研修④は、研修日変更のため、只今日程の調整中です。

多くの皆さんの参加をお待ちしています。
参加される研修については、要項で内容等をご確認ください。



授業（保育）実践論文 募集中！

実践論文を募集しています。

「論文をまとめてみよう！」と言われると、誰しも何やら堅苦しいイメージを持ってしまいます。

ただ、先生方が、目の前の子どもたちの成長を願って取り組んだ実践を文章化することは、自分の実践を振り返ることとなり、次への課題等が見えてくるものと思われまます。さらに、この実践論文を提出することにより、これを見られた先生方が新しいアイデアのもと、よりグレードアップした実践内容になることも期待されます。一つの実践がどんどん広がって、子どもたちの成長に役立っていくことは、素晴らしいことだと思います。

そこで、実践を論文の形に要約するための説明会を7月31日（木）14時から教育センターにて実施します。論文の締め切りは、10月6日（月）を予定しています。一度まとめてみようとお考えの先生は、ぜひ豊中市教育センター研究・研修係までご連絡ください。

とよなか「学び」プロジェクト研修

第一弾！ 関西大学 田尻悟郎 教授

講演のテーマを「自ら求め、伸びる子どもたち～授業の実践をとおして～」とし、8月11日（月）の午前10時から2時間、豊中市教育センターにてお話いただきます。

田尻先生は、島根県の公立中学校教諭時代より「学校を変えるのは授業である！」を信念に、子どもたちの思いや願いを深く見つめ、教科の枠を越えた実践に取り組んでこられました。このような、子どもたちの内面を育む指導のあり方について、熱く語っていただけるものと考えています。

語学教育研究所よりパーマー賞を受賞された先生は、その後ニューズウィークリー誌にて、「世界のカリスマ教師100人」に選ばれました。主著に「自己表現お助けブック」、「チャンツで楽習！決定版」（NHK出版）など著書多数。NHK総合テレビ「プロフェッショナル 仕事の流儀」にも出演されました。

今年の夏期教職員研修会は…

本年度は、JT生命誌研究館長 中村桂子先生をお迎えします。

生命誌研究館の「生命誌」とは、生き物全体の歴史を生命の物語として理解する試みのことです。

今回は「今も昔も子どもは・・・」と題して、昔の子どもたち、今の子どもたちの姿を生命科学の最前線を研究している研究者、母、祖母という様々なお立場から、興味深いお話が伺えるものと思っています。

中村先生は、東京大学大学院生物科学を修了。平成14年(2002年)よりJT生命誌研究館長に就任。中央教育審議会では、第1期～第2期の委員をされていました。また、テレビ番組では、「科学大好き 土よう塾」（教育テレビ）や「BSフォーラム」（デジタルBS2）にも出演されています。是非ご参加ください。

とき 8月28日（木）午前10時
会場 アクア文化ホール
テーマ 「今も昔も子どもは・・・」
講師 JT生命誌研究館
館長 中村桂子 先生



より細やかに

喜ぶ、怒る、悲しむ、楽しむ・・・子どもの生活は様々な感情に彩られています。とても嬉しいことがあって、『はじけるように』喜んだり、耐え難い辛いことに『ずしん』と落ち込んだりします。気持ちが『どんより』と曇る日もあるでしょうし、『スカッと』晴れやかに楽しい日もあるでしょう。怒りが『ふつふつと沸きあがる』こともあるかもしれません。なんとなく『もやもやする』『ざわざわする』など、明確に言葉に表しにくい感情もあります。

教育相談に訪れる保護者や子どもの気持ちに触れていると、気持ちのバリエーションの豊富さに、改めて気づかされます。大切な友達が転校してしまう別れの寂しさを、ある子は『バックリ』と引き裂かれるような生々しい痛みとして体験しました。また、ある子は『じんわり』とこれまでの交友を振り返り、『どっと』熱い涙がこみあげ、思わず『ぐっと』こらえる名残惜しさを体験したそうです。

気持ちには、いわゆる喜・怒・哀・楽と一文字で表現されることに加えて、もっと複雑なニュアンスで表現される要素があるようです。気持ちは時々刻々と変化し、強さと弱さ、するどさとなだらかさ、勢いとといった要素も持っています。スターンという研究者は、人間の気持ちの中でこうした言葉に表しにくい要素を、音楽のリズムや、トーンにたとえました。確かに、私たちは人と話をする時、抑揚や声の大小を自然とつけているようです。



子どもの話に耳を傾ける時、その時々的心情がどんなトーンで表されているか、またはその話し方のトーンにどんな気持ちがかもっているか、そんな視点をもってみると、子どもの話がより豊かにイキイキと聞こえてくるかもしれません。

言葉で表現される気持ちと、言葉になりにくい気持ちのトーン。そうした気持ちの幅広さに繊細に関心を向けることは、子どもの気持ちをより細やかに理解することにつながるように思います。

(高田)